

niponica

Discovering
Japan

2015
no.

17

にほにか



特集

小さくてもすごい!

日本の ミニチュア力



表紙・左／コップに
ひっかけて楽しむ
小さなフィギュア。
約5cm（21頁に関連記事）
©タナカカツキ/KITAN CLUB

日本語で「日本」を表す時の音「にっぽん (nippon)」をもとに名づけられた「にほんか (niponica)」は、現代日本の社会、文化を広く世界に紹介するカルチャー・マガジンです。日本語版の他に、英語、スペイン語、フランス語、中国語、ロシア語、アラビア語の全7カ国語版で刊行されています。

特集

小さくてもすごい!

日本のミニチュア力

04 華麗で繊細、
日本の伝統細密工芸

10 「時」を刻むものづくり

14 盆栽の新しい楽しみ

17 コラム:
顕微鏡から生まれたファッション

18 玩具を超えた玩具

22 召し上がれ、日本
キャラ弁24 街歩きにっぽん
伊勢志摩28 ニッポンみやげ
箸置き

左／3月3日に、女の子がいる家で小さな人形を飾って祝うひな祭り。
静岡県の一地方では、布人形「吊るし雛」が華を添える（写真＝アフロ）

no.17 2015年12月4日発行

発行／日本国外務省
〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1
<http://www.mofa.go.jp/>

特集 ちい
に ほん
小さくてもすごい!

日本のミニチュア力

俳句や盆栽、トランジスタラジオの例を挙げるまでもなく、日本には、世界を小さく凝縮させることに長けた、ミニチュア文化の歴史がある。縮小への美意識と技巧が生んだ、伝統工芸や工業製品、玩具などに見る、日本の小さくて、可愛くて、スゴイものたち。

武具を彩る 典雅な装飾

武士が持つ刀（写真下）にはめ込まれている鐔の両面にも、マツやツルが描かれた小さな世界が存在している「桜紅葉蒔絵脇指拵」19世紀末 6.2×6.9cm（所蔵＝根津美術館）



華麗で繊細、 日本の伝統細密工芸

武具から庶民の装身具、海外に輸出された芸術品に至るまで。当代随一の技が競って練り上げた、きらびやかな細密工芸の世界を、専門家が解き明かす。

談話 ● 黒川廣子



日本美術の歴史をさかのぼると、古代の漆芸や金工などに細密な技術をほどこした名品を目にすることができます。ただし、当初は神仏に捧げる法具や貴族の贅沢品といったひと握りの権力者に許された限定的な文化でした。精緻を競って磨いた技の成果を庶民が享受し、工芸のすそ野が多彩な広がりを見せたのは、町人文化が花開いた江戸時代（1603～1867）になってからのことです。江戸の細密工芸といえば、武士の刀装具がまずは挙げ



凝縮された 江戸のエスプリ

られます。先の戦国時代から受け継いだ、武士の象徴である刀を飾るという習慣が、泰平の世の中で細かく技を凝らす方向へと加速していきました。その一例に、刀の柄を握る手を防御するための「鐔」があります。直径7cm前後の金属板の表裏に花鳥風月が細かに刻まれ、密やかな世界をつくりあげている様は見事です。

ファッションが育てた技

また、着物文化が細密工芸を育てたという側面も否定できません。ラインが縦に長く、文様そのものを観賞する着物ファッションでは、宝石を中心としたネックレスやイヤリングが似合いにくい。そこで、女性のまとめ髪に挿す簪や、男性の刀装具といった、いわば実用を兼ねた装飾品でお洒落をして楽しむ風潮が生まれたのです。

腰から下げる装身具「印籠」はその代表格です。もともとは印鑑や薬を入れる容器でしたが、武士から始まった流行が庶民にまで浸透する頃には単なるアクセサリーと見なされるようになっていました。一般的なものは縦9cm×横6cmほどの長方形で、容器の外側に蒔絵（漆に金粉で描く技法）や七宝をはじめ複数の技法で絵や文様が描かれます。自然の風物やおめでたい文様、おとぎ話などをモチーフとしており、描き込まれた精緻

- 生き物や物語のキャラクターをかたどった、ユーモラスな根付
1. 両手で下駄を押さえる雷神「雷電」象牙彫り 高5cm
 2. 精巧に象嵌された目をはじめ細部を克明に写したカエル「干し柿に蛙」亮長作 ツゲ彫り 高3cm
 3. 江戸っ子が珍重したカツオの初物も根付に「牙彫初鯉根付」光廣作 象牙彫り 径4.1cm
 4. 前足を持ち上げた愛らしいポーズの小イヌ「小犬」亮長作木彫り 長3.5cm
 5. ナシの皮やハチのリアルな質感に目を見張る「梨に蜂」江月作 木彫り 高4.9cm
 6. 目を光らせ2頭の子どもを守る母トラ「親子虎」白龍作 象牙彫り 長3.5cm
 7. 寒さに羽毛をふくらませる姿がよくモチーフとされたスズメ「福良雀」漆塗り 長4cm
 8. 長寿の象徴モモを持つサル「猿」豊昌作 木彫り 高3.7cm

全て日本根付研究会編「根付―凝縮された江戸文化」（美術出版社、2005年）より転載



蒔絵と螺鈿（らでん）でツタを描いた印籠。同じく蒔絵の丸い根付が付いている「蕋蒔絵印籠」 6.8×4.9cm（所蔵＝国立歴史民俗博物館）

な絵柄からさまざまな声が語りかけてくるように見飽きることがありません。

印籠や巾着（布袋）、煙草入れなどを腰と帯の間に下げるための留め具「根付」もまた、小さな装身具としての需要が技の深化を助けました。木や象牙などを使い、機智に富むデザインと超絶技巧でわずか数cmの世界に森羅万象を凝縮した根付は、まさに江戸の庶民文化のミニチュアそのものの、といった趣があります。

世界を魅了した日本の工芸品たち

江戸時代には、鎖国政策がとられていたにもかかわらず、細密な文様が描かれた陶磁器や漆工品などが長崎の出島を通じて欧州へ盛んに輸出されていました。やがて時代が明治（1868～1912）へと移り国が開かれると、さらに多くの工芸品が海を渡り、政府の外貨獲得に貢献します。日本が出品を始めた1867年のパリ万博から、ウィ

ミクロの世界を 描き切る 超絶技巧

明治期の輸出の需要に応え、金や色絵で精緻な絵付をほどこした壺「色絵唐草文獅子鈕飾壺」錦光山宗兵衛作 高46.4、径23.2cm（所蔵＝東京国立博物館 Image: TNM Image Archives）

ーン、フィラデルフィアと、各国で開催された万国博覧会にも続々と日本の工芸品が出品され、大好評を博しました。

西洋の日本趣向は、やがて19世紀後半から20世紀初頭にかけて流行したジャポニスムにもつながっていきます。浮世絵が印象派の画家たちに大きな影響を与えたことはよく知られていますが、工芸作品などで色の違う金属を組み合わせて象嵌したり、昆虫をモチーフに選んだりすることも、欧州の作家たちの目にはとても斬新と映ったようです。エミール・ガレ（1846～1904）やルネ・ラリック（1860～1945）などアールヌーヴォーの作家の作品に見られる虫や鳥のモチーフなどもその好例といえるのではないのでしょうか。これら自然物のモチーフのルーツには、平安時代（794～1192）頃から続く、季節ごとに花鳥や虫の声などを愛でる文化の流れがありますが、厳密な写生にもとづく図案化で虫や鳥を描いた伊藤若冲



13羽の鶏が華麗に、細密に、重なるように描かれた伊藤若冲の傑作。若冲は18世紀に活躍した画家で、動植物の絵を数多く残した「群鶏図」（動植物絵）絹本着色 142.6×79.7cm 一幅（所蔵＝宮内庁三の丸尚蔵館）



(1716～1800) らの細密画は、^{さいみつ が} 昨今^{さつ こん}とりわけ注目を集めています。

時代^{じ だい}が変わって武士^{ぶ し}という地位^{ち い}がなくなり、^{はいとう れい} 廃刀令によって職^{しよく}を失う危機^{う しな き き}にさらされた金工職人^{きんこうしやくにん}たちを救ったのも、海外からの熱いニーズでした。産業振興^{さんぎょうしんこう}を掲げた明治政府^{めい じ}は工芸品^{こうげいひん}の輸出^{しゅつ}を推進し、金工^{きんこう}は再び活況^{かつきやう}を取り戻しました。

金属^{きんぞく}を細かく組み合わせることで本物^{ほんもの}そっくり^{うご}に動かせる動物^{どうぶつ}や昆虫^{こんちゅう}の模型^{も けい}「自在置物^{じざいおきもの}」もまた、明治^{めい じ}になって海外^{かいがい}に“発見”^{はっけん}され、優品^{ゆうひん}の多くが流出^{りゅうしゅつ}したもののひとつです。江戸^{えど}の武具職人^{ぶぐしやくにん}が始めたといわれる驚くべき仕事^{しごと}は、最近^{さいきん}になってようやく国内^{こくない}でもその真価^{しん か}が見直^{みなお}されています。

現代^{げん だい}日本で、^{に ほん} 小さなところ^{ちい}に力^{ちから}を込める技^この伝統^{わだ}が、産業^{さんぎやう}の要^{かなめ}である製造業^{せいぞうぎやう}に受け継^うがれているのは間違^{まちが}いなしでしょう。そして、根付^{ねつけ}に似たキーホルダーや携帯電話^{けいたいでん}話^わのストラップ、あるいはフィギュアなどを見^みるにつけ、細かなものや精巧^{せいこう}な模型^{も けい}を愛玩^{あいがん}する心情^{しんじやう}が、今^{いま}なお変わ^かっていないのだと思^{おも}えてなりません。

黒川廣子（くろかわ・ひろこ）
東京芸術大学大学美術館准教授。専門は近代日本工芸史。著書に『明治・大正図案集の研究—近代にいかされた江戸のデザイン』など



2

華と技を競った 輸出工芸品



1. 足や爪、口を含め全身を節々まで動かせる龍の自在置物。作者の明珍宗察は甲冑師だった「自在龍置物」長136.5cm（所蔵＝東京国立博物館 Image: TNM Image Archives）
2. 金、銀、銅と異なる色の金属を組み合わせた皿。装剣金工の巧緻な技が、明治の工芸に生かされた「菊花・虫図皿」（表・裏）正阿弥勝義作 5.9×27.7×25.9cm（所蔵＝林原美術館）

5

4

3

3. チョウとサクラをモチーフにした並河靖之作の七宝皿。七宝は、1889年のパリ万博で大人気を博した「桜蝶図平皿」径24cm
4. 細密な絵が描かれた小さな七宝の香水瓶「花蝶文香水瓶」並河靖之作 高8cm（3.4.ともに所蔵＝清水三年坂美術館、写真＝木村羊一）
5. 羽や足が動かせる虫の自在置物「十二種昆虫」のうちトンボ 高瀬好山作 長7.5cm（所蔵＝三井記念美術館）

「時」を刻む ものづくり

日本の腕時計の歩み

腕時計は、高度な技術なくしては
つくり得ない直径数cmの精緻な世界。
日本の製造業が長らく
得意としてきた分野だ。
高い性能と、随所にうかがえる
こまやかな心配りが身上の
日本製腕時計の歴史を見てみよう。



写真提供●セイコー、シチズン、カシオ、
セイコーミュージアム、日本時計協会、
PIXTA

上／セイコー「アストロン」の名を冠
したモデル。GPS衛星を利用した自動
時刻修正機能によって、エベレスト山
頂から南極に至るまで世界中どこでも
正確な時刻を知ることができる
右／薬などを携帯するための小箱（印
籠）に仕込まれた印籠時計。文字盤の
数字を移動させることで、季節で変わ
る昼夜の長さの違いに対応する。べっ
こうを用いたり時絵をあしらったり、
豪華な装飾がほどこされている



日本の時計産業の原点 和時計の独創性

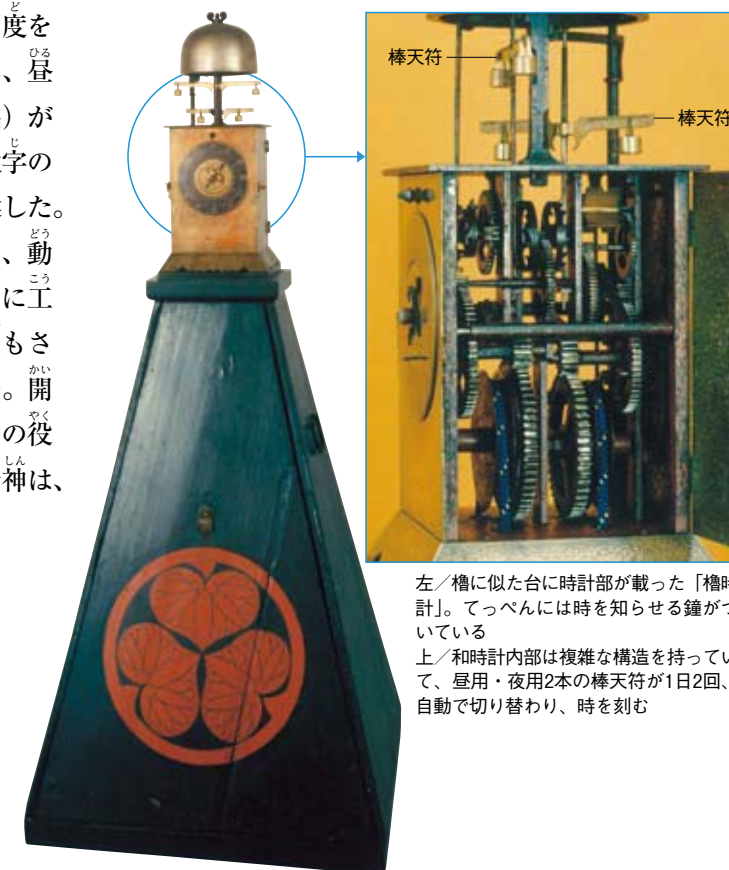
日本の時計産業は、16世紀中頃、ポルトガルの宣教師
が持ち込んだ1台の機械時計から始まった。その後まも
なく、江戸幕府の鎖国政策によって外国との往来がなく
なり、日本の時計は独自の発展を遂げることになる。「和
時計」だ。

和時計の最大の特徴は、不定時法に基づいていること
だ。今日、われわれが使っている定時法が1日を均等に
24時間に区切るのに対し、不定時法とは1日を昼と夜に
分け、それぞれを等分して時間の単位とする。西洋では
機械時計の普及とともに定時法が浸透していったが、日
本では、自然のリズムを尊重する不定時法が暮らしの軸
であり続けていたのだ。

昼夜の長さは季節によって異なるため、夏と冬では単

位当たりの時間の長さも変わる。この複雑な時刻制度を
どう表現するか。時計師たちは試行錯誤を繰り返し、昼
用・夜用2本の天符（振り子と同じ働きをする部品）が
1日2回自動的に切り替わる仕組みや、文字盤の数字の
間隔を変えて時間の長短に対応する表示などを考案した。

鐘楼や火の見櫓に似た形の台に載せた「櫓時計」、動
力となる重りが針の役割も兼ねる「尺時計」、表面に工
芸の粋をほどこした携行用の「印籠時計」など意匠もさ
まざま。和時計は技術的にも装飾的にも優れていた。開
国後の1873年に日本でも定時法が導入されると、その役
目を終えたが、時計師たちの匠の技や創意工夫の精神は、
現代の時計産業に継承されていく。



左／櫓に似た台に時計部が載った「櫓時
計」。てっぺんには時を知らせる鐘がつ
いている
上／和時計内部は複雑な構造を持って
いて、昼用・夜用2本の棒天符が1日2回、
自動で切り替わり、時を刻む

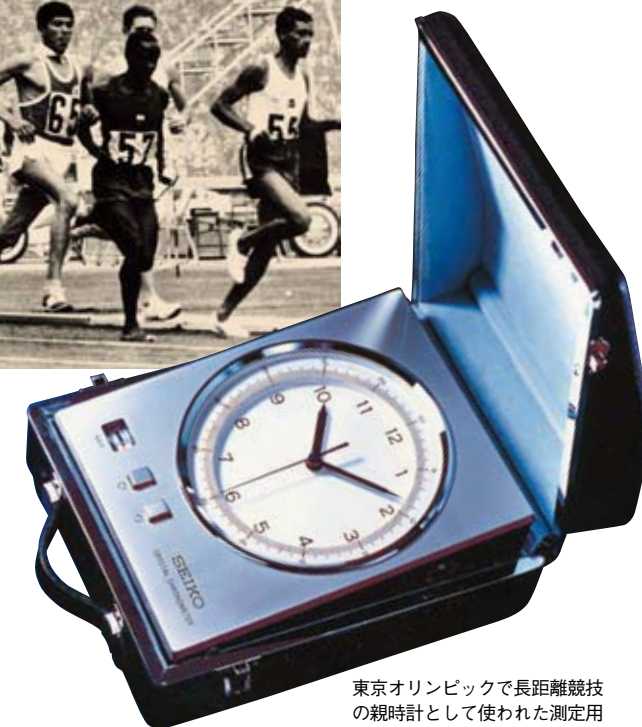


1964年の東京オリンピックの測
定では、ストップウォッチや大
型表示など36機種1278個もの
機材が使用された。写真はマラ
ソン競技

全ての人に正確な時を届ける クオーツ腕時計の登場

日本の時計産業が脚光を浴びたのは1969年。クオーツ
腕時計を世界で初めて商品化（12頁）した時だった。

水晶振動子を利用したクオーツ時計は、1927年にアメ
リカで開発されていたが、なかなか実用化に結びつかな



東京オリンピックで長距離競技
の親時計として使われた測定用
クオーツ時計（1963年、セイ
コー）。低電力・小型化によっ
て携帯が容易になり、世界各地
の競技大会で公式測定装置に採
用された



機械式腕時計の組み立てライン
(1970年頃、セイコー)。日本
の時計産業は1950年代後半、
品質管理や量産体制が整えられ
た結果、60～70年代にかけての
生産数量が著しく伸びた



右／世界初のクォーツ腕時計
「クォーツアストロン」(1969年、
セイコー)。1日の誤差が0.2秒、
1カ月でも5秒という正確さは人
びとを驚かせた
左／アストロンの動力機構部



世界初の多局受信型電波修正腕
時計 (1993年、シチズン)。日
本、イギリス、ドイツの標準電
波を受信して正確な時刻を表示。
文字盤中央に配されているのが
アンテナ

耐衝撃性を徹底して追求した初
代G-SHOCK (1983年、カシ
オ)。10mの高さから落下して
も壊れないなど、それまでの時
計の常識を覆し、人気を呼んだ



かった。最大の問題はサイズで、日本で初めて商品化され
たクォーツ時計は高さ2mとタンスほどの大きさだった。
続いて開発された船舶用クォーツ時計は45cm角と小さく
はなったが、重さは30kg。携帯は不可能だった。ところが、
東京オリンピックを翌年に控えた1963年、スポーツ競技の
測定用として、縦20cm×横16cmのクォーツ時計がリリース
される(11頁)。重さもわずか3kg。一気に小型軽量化が進
んだのだ。それをさらに進化させたのが、クォーツ腕時計
である。

タンスサイズから腕時計へ。技術者たちの努力により、
着用時の衝撃にも耐える安定性を実現し、精度もさらに
高められた。

当初、新型クォーツ腕時計は自家用車が買えるほどの
値段だったが、数年も経たないうちに量産体制が整い、
あっという間に大衆に普及していった。精度の高さと大
量生産が両立したことで、世界の時計産業は大きく変貌
を遂げていく。クォーツ腕時計の出現は、数百年に及ぶ
時計づくりの歴史において画期的な出来事だった。



初代「アストロン」は時計業界に技術革新をもたらした。
正確な時を追い求める精神は、先端技術を駆使した現在の
腕時計に受け継がれている

世界中どこでも正確な時を 高機能で高品質な時計

現在も腕時計をめぐるテクノロジーは進化し続けている。
日本はその主要な担い手のひとつだ。技術者たちは、
耐衝撃性の向上、高度や気圧などの計測機能、スマート
フォンとの連携といった付加価値の追求に余念がない。
光エネルギーや人の動きで発電したり、電波を使って自
動的に時刻を修正する高度な機能も、高価な上位モデル
だけのものではなくなってきている。最近ではGPS衛星
を利用した電波修正時計が他国に先駆けて発表され、世
界中どこにいても正確な時刻を表示できるようになった。

ものにはつくり手の意識や心持が反映される。衛星
を使ってまで常に正確な時間を知ろうとする生真面目さ
は、時間に正確で几帳面な日本人の国民性そのものとい
えるかもしれない。

最先端の機能を搭載し、壊れにくく信頼できる。品質
は高いが、価格が手ごろで誰もが身に着けられる。緻密
で、堅実で、少々堅苦しいほど規則正しい。それが日本
の時計の特長だ。機会があれば、小さな時計に込められ
た日本の技術と精神を、確かめてみてはいかがだろうか。



シチズンの最新GPSモデル
「アテッサF900」。光エネルギ
ー発電も進化し、わずかな室内
光もエネルギーに変換できるよ
うになった。定期的な電池交換
が不要で、環境にも貢献している

カシオ製G-SHOCKの最新モデ
ル。標準電波とGPS衛星、ど
ちらにも対応する時刻修正機能
が特長。シリーズの中にはスマ
ートフォンとの双方向操作が可
能なタイプもある



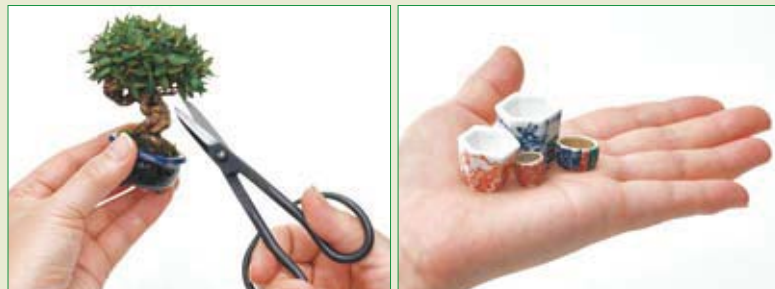
盆栽の新しい楽しみ

小さな鉢に自然を再現した、
豆盆栽やアート盆栽の世界

四季のうつりや景観を鉢の中に再現する「盆栽」は、
自然を凝縮した芸術として世界中で愛されている。
花や実、木の枝ぶりを整え、鉢との組み合わせに心を配り、
自然以上の美しさをつくりだす。

そんななか、魅力はそのまに、
身近に置けるように極小にまでミニチュア化された盆栽や、
ポップカルチャーと融合した盆栽が生まれている。
手のひらに乗るほどの鉢を使った豆盆栽や、
フィギュアを飾りジオラマのような世界をつくりあげる盆栽、
はては人工の素材で仕立てた枯れない盆栽まで、
さまざまに広がる魅力を紹介する。

写真●栗林成城 協力●一木一草話



左／小さな盆栽といえども、形をきれいに保つためには、枝や幹の剪定が欠かせない
右／豆盆栽用の鉢は、手のひらにいくつも乗るほど小さい。樹や花に合わせ鉢の模様や形を選ぶのも、楽しみのひとつ



左／黄色い実と葉のバランスが絶妙なクサボケ
右／右から左へ視線が流れるよう、枝ぶりが整えられた姫ザクロ。可愛い赤い実がアクセント

極小の美を生み出す 豆盆栽

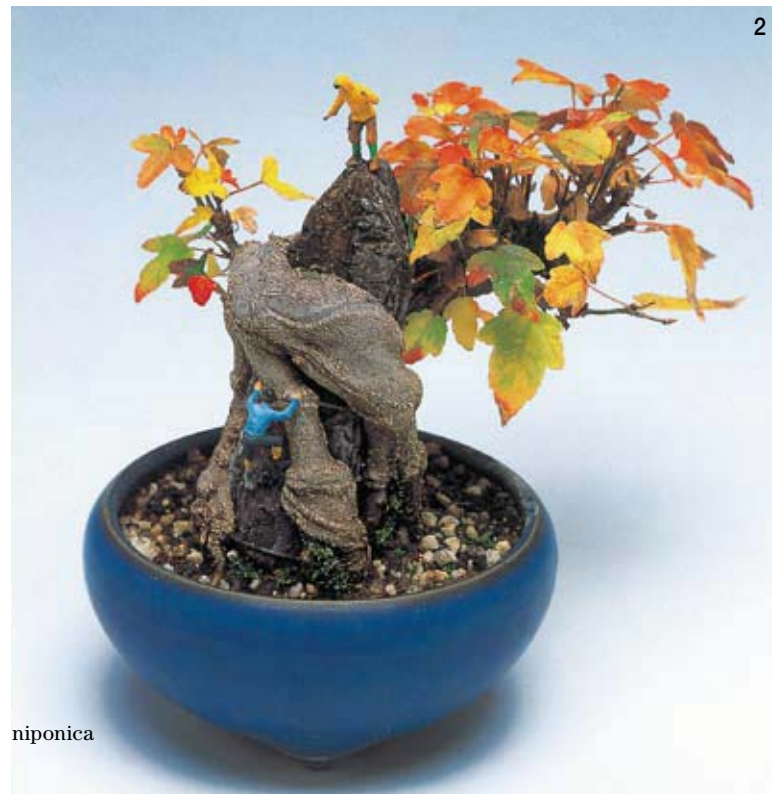
日々の暮らしに季節の彩りを添えてくれる盆栽。10cmに満たない豆盆栽は、より気軽にとり入れることができる。湯のみ下より時計まわりに、ニレケヤキ、ヒメフウチソウ、サンザシ、真柏（ミヤマビャクシン）、ヤマモミジ





盆栽をテーマに 新しい世界をつくりだす

1. テマパークのような世界をつくりだすアート・ディレクター 相羽高徳氏は、リゾート地のツリーハウスをイメージした「Bonsaiアート」を制作（写真：益永研司／Nacasa&Partners ©TOKYO GOOD IDEA Development Institute Co., Ltd）
2. 人物フィギュアを配し、ストーリーのある盆栽をつくるパラダイス山元氏の作品。盆栽をカエデが色づく秋の山に見立て、登山を楽しむ光景を生み出した（写真：田中秀樹）

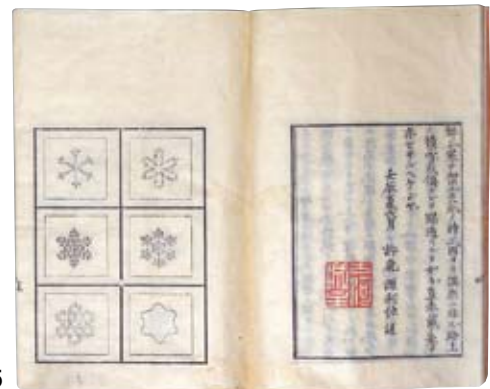
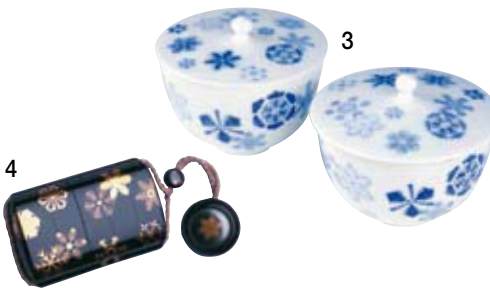


変わり種の素材でつくる ポップな豆盆栽

- 3.4. 色とりどりのワイヤを使い、枝ぶりや幹の模様まで模した、アメリカ人アーティストKen To氏の豆盆栽。植物にはないメタリックな輝きが魅力

顕微鏡から生まれたファッション

雪の結晶模様と江戸の粋



1. 雪華模様を現代のファッションに生かしたシャツ（協力＝NEEDLES、UNEVEN GENERAL STORE）
2. 雪華模様の着物をまとった女性が描かれた浮世絵。「江戸の松名木尽 押上妙見の松」 溪斎英泉（所蔵＝古河歴史博物館）
3. 流行はうつわにも及んだ。19世紀の煎茶碗「雪結晶模様 煎茶碗」（武雄鍋島家資料／所蔵＝武雄市）
4. 江戸時代を代表する時絵師・原半遊斎による「雪華文時 絵印籠」（所蔵＝古河歴史博物館）
5. 雪のお殿様・土井利位がまとめた『雪華図説』（所蔵＝古河歴史博物館）



玩具を超えた玩具

アニメキャラクターや乗り物や動物、美術品までを網羅する日本の模型は、多様さと高い品質に定評がある。精巧な模型づくりの秘密を探して、ふたつの製作現場を訪ねた。

写真●名取和久

プラモデルのリアリティを生む町工場の職人技

東京の下町、江戸川区にある秋東精工は、プラスチックを射出してプラモデルをつくる「金型」のメーカーとして、1978年に創業した。プラモデルの金型は、多くのパーツを1枚に組み合わせて成型するため、それぞれのパーツでわずかな歪みやサイズのズレが出やすいが、接着剤を使わずに組み立てる「はめ込み式」の金型づくりは特に難しい。そのはめ込み式プラモデル金型をはじめ、繊細な金型を得意とする秋東精工は、小さな工場から数々のヒット作品の金型を製作し日本の模型界を支えてきた、匠の集団だ。

創業者で会長の柴田幹雄さんは、国産初のプラモデル「原子力潜水艦ノーチラス号」を手がけた人。「当時はタガネという、ノミのような道具で金属を彫って金型をつくった。何度も失敗したけど、工夫をするのが楽しくてしょうがなかったね」と笑う。

現在は、コンピュータで設計後、3Dプリンタを使って見本をつくり、機械で金属塊を切削加工する。刃物では微細な角が削れず、わずかに曲面が残るため、さらに電気で溶かして角を取っていく。

そして最後の、100分の1mm単位の調整を行うのは熟練した職人たちの「手」だ。接合部に塗料を塗って合わせ、表面のムラを確認し、手で触りながら、電気式のやすりで削る。経験と感覚に頼る作業で、一人前になるには最低でも5年はかかる。

精度の高い金型からつくれば、かつてプラモデルの接合部に多く見られた「バリ」と呼ばれる残材部分が出ることはない。何より、全員が“あってはいけない”と思



1. 手で触りながら金型を最終確認
2. 船のプラモデルと金型
3. 自ら手がけた国産初のプラモデル「ノーチラス号」を持つ柴田幹雄さん
4. 塗料を塗って表面のムラを確かめながら、やすりで金型を削っていく

5

1. フィギュアの原型を仕上げる原型師の寺澤光さん
2. 自社製品を持つ「いきもん」代表の佐藤純也さん
3. 手製の道具が活躍
4. 原型から完成までには、いくつもの段階がある
5. 「南極」シリーズのひとつ、ヒョウアザラシ

ってやれば、バリのない製品がつくれるのだという。高い目標を具体化し皆で共有することが、物づくりには欠かせないようだ。

カプセルに込めた小さな命の世界

日本では、スーパーマーケットやゲームセンターの自動販売機で手軽に買える「カプセルトイ」に入った小さなフィギュアが、長らく不動の人気を保っている。1960年代に米国からガムボールマシンとして輸入された当初、入っていたのは10円ほどの安価なおもちゃだったが、70年代以降はアニメキャラクターの消しゴム、フィギュアへと中身が変化していき、現在は300円前後の商品が主流となっている。

「日本のカエル」「南極」など、自然生物を専門としたカプセルトイ向けフィギュアを手がけるメーカー・いきもんから生み出されるフィギュアは、1シリーズ6～8種類。物によっては分解したり、折り曲げたりして直径40～75mmのカプセルに収める。

生物のフィギュアは、生きている感じを出すのが難しく、ちょっとした首の角度や眼の描き方にも妥協しないという。彩色も重要だ。企画から商品完成までの期間は、通常なら半年から7、8カ月、長ければ2年近くかかるものもある。

フィギュアの元となる型をつくるのが、原型師。樹脂を電気グラインダーで削り形づくっていくが、細部を再現するため木や真鍮の糸でできた手製の道具も駆使する。「原型づくりには、正解も模範もない。だから皆、それぞれに方法が違ひし、道具も工夫するんです」と話すのは、15年のキャリアを持つ寺澤光さん。

早ければ1シリーズの6個ほどを1カ月で仕上げるが、悩むと1年以上かかってしまうこともある。

「うまくいっていないときは、ひと目見ただけで違和感がある。最初はなぜそう感じるかが分からない。腕のラインかな、ポーズかな、とあたりをつけて細部をやり直していくと、どんどん時間が経ってしまうんです」

手軽に安く買えるフィギュアにも、高い完成度が求められ、その要求に応えるづくり手がいる。彼らの切磋琢磨があればこそ、日本の模型文化が成り立っているのだといえるだろう。

印象や手触りといった極めて人間的な感覚が品質を支えている日本の模型には、どこか温かみすら感じられる。そんな血の通った玩具だからこそ、老若男女を問わず、あらゆる人を夢中にさせてしまうのかもしれない。



アニメ「機動戦士ガンダム」シリーズに登場するモビルスーツなどのプラモデルは、1980年の発売から累計約4億4千500万個を売り上げたほどの人気を誇る。HGUC 1/144スケール RX-78-2ガンダム（バンダイ）
©創通・サンライズ



2015年に廃止された寝台旅客列車の車内が克明に再現された1/12スケール模型。内装模型24系25形トワイライトエクスプレスB寝台（トミーテック）
©TOMYTEC / JR西日本商品化許諾済



単3乾電池とモーターを動力に、四輪駆動で走行するプラモデル。改造パーツを装着し専用コースを使ったレースが楽しめる。ミニ四駆スターパック ARS ビードタイプ（エアロアバンテ）（タミヤ）
©TAMIYA



食品サンプルが生まれた国では、料理模型も小さく進化中。注文タッチパネル(左上)など新システムまで備えた回転寿司のミニチュア。ぶち回転寿司(リーメント)
©2015 RE-MENT



特撮テレビドラマで人気の、色分けされたマスクとスーツで武装した戦隊ヒーローたち。ニンニンアクションシリーズ01-03（バンダイ）
©2015 テレビ朝日・東映AG・東映

日本の模型、大集合!

プラモデル、フィギュア、ジオラマ、鉄道模型……。

アイデアと技術の粋が詰まった、広くて小さな世界を楽しもう。



教材などに使われる人体模型をフィギュア化。心臓では左右心室、交感神経の分布状態までをリアルに再現。心臓と頭部の構造模型（ネイチャーテクニカラー）
©いきもん



木や池、岩石のある情景にセットされたトリケラトプスには、歩く姿と走る姿が選べる2種類の前足が用意されている。1/35恐竜世界シリーズ トリケラトプス情景セット（タミヤ）
©TAMIYA



城の愛好家には手ずから再現したいと思う人が多く、さまざまな模型がつくられてきた。プラモデルもそのひとつ。1/700スケール 大阪城（FUJIMI）
©FUJIMI MOKEI Co., LTD.



フィギュアはついに伝統彫刻にまで世界を拡げた。関節を動かしてポーズを変えることで、躍動感にあふれた仏像が楽しめる。十一面観音（海洋堂）
©海洋堂

2014年に生誕60周年を迎えた怪獣「ゴジラ」の迫力満点のフィギュア。可動性に富み、劇中の動きを生き生きと再現できる。S.H.MonsterArtsゴジラ全高約155mm（バンダイ）
©TOHO PICTURES, INC. TM & ©1995, 2014 TOHO CO., LTD.

ヴァーチャル・シンガー「初音ミク」のイベントのメインビジュアルを立体化。ライブ感あふれるイラストを細部までこだわり抜いて再現。初音ミク「マジカルミライ 2015」Ver.（マックスファクトリー）
©穂嶋 / Crypton Future Media, INC. www.piapro.net / TOKYO MX Illustration by 穂嶋 / Costume design by しきみ



コップのフチにひっかけて遊ぶカプセルトイ。さまざまなポーズの種類を集める楽しみもある。コップのフチ子（KITAN CLUB）
©タナカカツキ/KITAN CLUB



マンガやアニメの劇中効果音を表現し、今までにない飾り方が楽しめるフィギュア。フィギュアーツZERO モンキー・D・ルフィ —5th Anniversary Edition—（バンダイ）
©尾田栄一郎／集英社・フジテレビ・東映アニメーション



開業に先駆け、模型で登場したリニアモーターカー。車体を磁力で浮かせた状態で磁石の反発力を使って進む、世界初のレールトイ。リニアライナー 超電導リニアL0系スペシャルセット（タカラトミー）
©TOMY / JR東海承認済



召し上がれ、
日本

7

キャラ弁

描いて伝える楽しい昼ご飯

協力●宮澤真理、鈴木美穂



Aflo

食材を使って動物や人形、アニメやマンガのキャラクターを描く絵のような弁当、「キャラ弁」(キャラクター弁当の略)。家族や友人のための弁当をより楽しくしようと趣向を凝らしてつくりあげ、日々の「作品」としてブログなどに掲載する人も少なくない。

使う食材はごく一般的なもののばかりだ。ご飯を動物やキャラクターの輪郭を模して固め、黒ゴマや海藻のノリで眼や口を描く。卵で黄色、ニンジンでオレンジ、キュウリで緑と、表現したい色に合わせて食材を選ぶ。薄いハムやチーズは文字や模様を切り抜くのにうってつけだ。ご飯を固める型やノリの抜き型などの道具もまた、「絵」の完成度を上げるのに一役買っている。

弁当に絵を描くことは、何も突然に始まったわけではない。ウィナーやリングをタコやウサギに見立てて切り、弁当のおかず添えることは40年以上前から行われていたし、千葉県には、江戸時代(1603~1867)からつくられているという巻きずしで絵を描く郷土料理「太巻き祭り寿司」がある。日本の家庭料理には、昔からその伝統が息づいていたようだ。

キャラ弁の本を多数出版し、サイトも運営している宮澤真理さんの場合は、2002年から家族のためにつくり始めた弁当が、キャラ弁制作のきっかけだった。

「普通の弁当づくりに飽きた頃、ふとニンジンを花形に抜いてみたら、意外に楽しかった。それからは工夫するのが面白くなって。これならずっと続けられると思いました」

キャラ弁からは、つくり手の相手に対する愛情やエールが容易に伝わってくる。つくる方も食べる方も楽しめるコミュニケーションツール、というのが宮澤さんの持論だ。

見た目が美しければ、味もおいしい。だから盛りつけや器にも心を砕く。キャラ弁も、そんな和食の哲学の延長線上にある、新しい料理のひとつといえるのかもしれない。

弁当のふたを開ければ、子どもは歓声をあげ、大人は微笑む。キャラ弁は、日々の暮らしを楽しむための、小さな工夫の結晶なのだ。

身近な食材で動物を描いたキャラ弁。ウサギはご飯、ヒヨコはウズラ卵、顔の表情は黒ゴマやノリで表現。黒いノリは時間が経つと湿ってよれてしまうため、薄いチーズにのせて固定する

ハム、ノリ、薄焼き卵で大人気のマンガヒーロー「ナルト」を見事に再現。黒目を大きめにするなど、キャラクターに似せるための工夫を凝らす
©岸本斉史 スコット/集英社・テレビ東京・びえろ



具材で切り口に花や模様を描く千葉県の郷土料理「太巻き祭り寿司」。野菜や卵を使い、ご飯の盛り方を調整したり細い巻きずしを組み合わせるで巻いたりして柄を出す。ここでも絵の線を描く画材として、ノリを多用する(写真=明角和人)



パンの上でキャンプをする子ブタたちはウズラ卵とハム製。テントは卵焼き、木々はブロッコリー、焚き火はニンジンとゴボウを炒めたキンピラゴボウでできている。お弁当のおかずになりみ深いものを使うことで違和感なく、おいしく食べられる



ゆたかな自然と伝統文化に彩られた

伊勢志摩

写真●宮村政徳、アフロ、株式会社赤福
地図制作●尾黒ケンジ

伊勢志摩地方は、青く美しい海と大小の島々がもたらす景観と、
悠久の歴史に育まれた伝統文化を有する



左／伊勢神宮内宮の宇治橋前からのぞむ日の出（写真＝伊勢志摩コンベンションセンター）
右／境内にはクスノキをはじめ、スギの大木やケヤキなどの天然樹林が広がり、清涼な空気が流れる



三重県東部、太平洋に面した伊勢志摩地方は、日本でも有数の観光地だ。岬と入り江が入り組んだ海岸線や、2016年のサミット開催地に選ばれた賢島を含む大小の島々が織りなす景勝が美しいこの地は、日本の神々の中でも最も崇敬される天照大御神を祀る伊勢神宮のおひざ元でもある。

伊勢神宮は、太陽にたとえられる神・天照大御神を祀る内宮と、衣食住を司り産業の守護神である豊受大御神を祀る外宮から成る。古来、信仰を集め、一生に一度は訪れたい庶民の憧れの地とされ、今もその人気は衰えていない。

参拝は、まず外宮から行い、その後、6kmほど離れた内宮へと向かうのが古くからの習わしだ。内宮の玄関口にある宇治橋は、日常の世界から神聖な世界へと導くかけ橋といわれる。境内には樹齢500～1000年と推定される木々が多数あり、清涼ながら厳かな雰囲気漂う。

伊勢神宮では、20年に一度、正宮をふくむ建物、神様に奉る御装束神宝などを新しく造り替え、神様に新しい社殿にお遷りいただく「式年遷宮」と呼ばれる儀式があり、1300年続いている。20年に一度行うのは、優れた職人技術を伝承していくためでもあるといわれている。



上／宇治橋を出て五十鈴川沿いに800mほど続くおはらい町や、その中央にあるおかげ横丁には昔ながらの町並みが広がり、多くの観光客が訪れる
下／伝統工芸である、色とりどりの糸を組み上げる組紐の技術によりつくられた美しいストラップ（くみひも平井）





宮大工が始めたといわれる伊勢一刀彫は、木材の木目を生かしながら一気に彫り上げる
右／伊勢一刀彫の職人である岸川行輝さんはこの道36年。複数の彫刻刀を駆使し、20分ほどで高さ3cmの一对の恵比寿大黒像（写真上）を完成

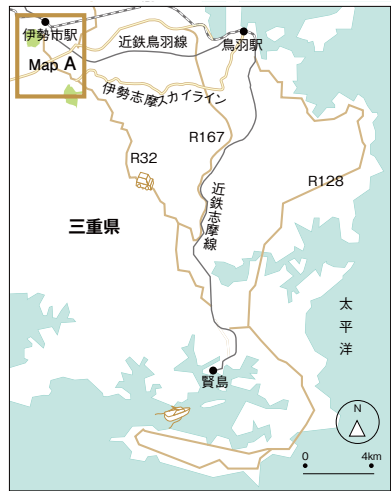
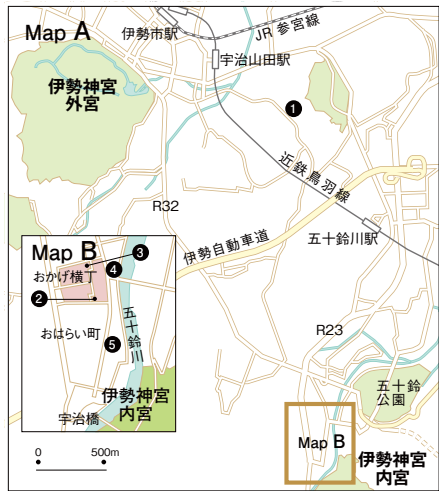


伊勢の伝統工芸品は、おかげ横丁にある神路屋などで気軽に購入できる
左／鮮やかな色彩が特徴の伊勢玩具。みやげ物として、古くからつくられてきた
中／伊勢型紙を使って模様を染め抜いた手ぬぐい
右／筍や宝槌などをかたどった根付は、日本が誇る細密工芸のひとつ。伊勢では「木の宝石」とも呼ばれる、木質の堅いツゲを用いる



内宮のそばには、古くから門前町として栄えるおはらい町があり、みやげ物屋や飲食店が立ち並ぶ。一番人気は、1707年創業の老舗和菓子屋のあんこ餅だ。また、1993年の式年遷宮の折には、伊勢の歴史や風習を継承するために、おはらい町の中に古い町並みを再現したおかげ横丁がつくれ、今では終日多くの人でにぎわっている。
おみやげには、お伊勢参りの伝統から生まれたものが豊富に揃う。みやげ物として古くからつくられてきた伊勢玩具、小物を紐でつるす際に留め具として使う伊勢根付、柄や文様を染色する伊勢型紙を使った工芸品は、その代表例だ。なかでも、神宮ゆかりの動物や縁起物をか

たどった伊勢一刀彫は、神宮の造営に奉仕する宮大工が神宮の端材を使ったのが始まりといわれ、直線的で荒削りな作風による素朴な温かみは、見る人を和ませる。
さらに、伊勢志摩の豊富な海の幸で、ぜひとも味わいたいのは、特産の伊勢エビだ。美しい真紅、長いヒゲが長寿を表すとしておめでたい席に欠かせない伊勢エビは、刺し身や姿焼きなど、さまざまな料理が楽しめる。またこの地は和牛の特産地でもある。牛肉を野菜と焼く網焼きは、肉の柔らかさと甘みを堪能できる。
豊かな自然に育まれ、美しい伝統工芸が受け継がれる地・伊勢志摩に、あなたも魅了されるだろう。



1.2. 五十鈴川のせせらぎをかたどった鮎を餅にのせた赤福餅は、伊勢みやげの定番だ。店内でお茶とともに味わえる 3. 和牛肉を醤油ベースのタレにからめて炭火で焼き上げる「豚捨（ぶたすて）」の網焼き 4.「倭庵（やまとあん）黒石」では、甘みのある伊勢エビの造り、アワビ、フグなど伊勢志摩の海の幸を堪能できる 5. 砂糖とショウガの搾り汁を煮詰め固めた生姜糖。六角形は、神宮のお札の形を模しているという

伊勢志摩エリア地図

- 交通案内
東京駅からJR東海道新幹線で名古屋駅へ。JR線か近鉄線で伊勢市駅／宇治山田駅まで約90分。
- 問い合わせ
伊勢神宮
<http://www.isejingu.or.jp/english/>（日・英・中・韓）
伊勢伝統工芸保存協会
<http://www.ise-dentoukougei.com/>（日本語のみ）
おかげ横丁
<http://www.okageyokocho.co.jp/>（日本語のみ）
- ①倭庵黒石
<http://kuroisi.com/>（日本語のみ）
- ②豚捨
<http://www.butasute.co.jp/restran/okage/index.html>（日本語のみ）
- ③神路屋
<http://www.okageyokocho.co.jp/tenpo.php?no=44>（日本語のみ）
- ④赤福
<http://www.akafuku.co.jp/global/english/>（日・英）
- ⑤くみひも平井
<http://www.dento.gr.jp/hirai/index2.html>（日・英）



食卓を彩る 箸置き

写真・栗林成城

卓上で箸をのせる小さな道具「箸置き」は、和食の席には欠かせないアイテムだ。箸を清潔に保つだけでなく、もてなしの心を表したり、自然の風物をかたどったもので季節感を演出したりする重要な脇役として、存在感を発揮する。

その歴史は、平安時代（794～1192）の初期頃、神に捧げるお膳の中央に耳をかたどったような土器を置き、その上に箸をのせて用いたのが始まりとされるほど古い。使い方としては、箸の先端をのせるの

ではなく、先が3 cmほど箸置きから出ている状態が、正解である。また、中国やベトナムでは箸を縦に置くのが一般的だが、日本では横向きにするのが正式なため、箸置きは左側に置かれる。

近年は、伝統工芸の技と意匠を生かした品が豊富に揃うので、おみやげとして選ぶ機会も増えている。四季の風物を凝縮した小さなオブジェが、食卓を明るく華やかに演出してくれるだろう。

niponica

にほにか

〈日本語版〉

2015 no.17

発行／日本国外務省

〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1

<http://www.mofa.go.jp/>（外務省ホームページ） <http://web-japan.org/>（日本紹介ウェブサイト）